

## 博士学位論文審査報告書

## Summary of Doctoral Thesis and Report of Examination

研究科長 殿

下記のとおり、審査結果を報告します。

To the Dean:

We report the result of Examination for the Doctoral Thesis below.

学籍番号 Student I.D. No.: 4008S004-1

学生氏名 Name: 上村 威

和文題名 Title in Japanese: 文化による国家アイデンティティの構築

英文題名 Title in English: Cultural Construction of National Identity

記

早稲田大学博士論文(審査報告書)		
	学位記	文科省報告
2012	6247	甲3825

## 1. 口述試験参加教員 Faculty Members Involved in Oral Examination

## ①審査委員会主査 Chief Referee of the Screening Committee

氏名 Name: 天児 慧 印

所属 Affiliated Institution: 早稲田大学アジア太平洋研究科

資格 Status: 教授

博士学位名・取得大学名: Ph.D. Title Earned・Name of Institution

博士

## ②副査(審査委員 1) Deputy Advisor (Member of Screening Committee 1)

氏名 Name: 劉 傑 印

所属 Affiliated Institution: 早稲田大学社会科学総合学術院

資格 Status: 教授

博士学位名・取得大学名: Ph.D. Title Earned・Name of Institution

博士

## ③審査委員 2 Member of Screening Committee 2

氏名 Name: 青山 瑠妙 印

所属 Affiliated Institution: 早稲田大学教育学部

資格 Status: 教授

博士学位名・取得大学名: Ph.D. Title Earned・Name of Institution

博士

## ④審査委員 3 Member of Screening Committee 3

氏名 Name: 篠原 初枝 印

所属 Affiliated Institution: 早稲田大学アジア太平洋研究科

資格 Status: 教授

博士学位名・取得大学名: Ph.D. Title Earned・Name of Institution

博士

## ⑤審査委員 4 [該当者のみ] Member of Screening Committee 4 [if any]

氏名 Name: 印

所属 Affiliated Institution:

資格 Status:

博士学位名・取得大学名: Ph.D. Title Earned・Name of Institution

## 2. 開催日時 Date / Time:

(Y)2012/(M)12/(D)19 (Time) 5 時限 ~ 6 時限

[時限 / Period] 1<sup>st</sup>: 9:00-10:30, 2<sup>nd</sup>: 10:40-12:10, 3<sup>rd</sup>: 13:00-14:30, 4<sup>th</sup>: 14:45-16:15, 5<sup>th</sup>: 16:30-18:00, 6<sup>th</sup>: 18:15-19:45, 7<sup>th</sup>: 20:00-21:30

## 3. 会場 Venue:

19-501

## 4. 合否判定 Result:

合/Passed・否/Failed (該当する方に○ Circle as appropriate)

## 5. 添付資料 Attached document(s)

枚 pages (和文4,000字程度、もしくは英文1,500語程度。ただし、論文題目のみは、和文・英文を併記すること)

(Approximately 4,000 characters in Japanese, or 1,500 words in English. The Doctoral Thesis title, however, must be written in both Japanese and English.)

## 博士論文審査報告書

学生氏名: 上村 威

学籍番号: 4008s004-1

題名 title: Cultural Construction of National Identity—*Guanxi* and Chinese Foreign Relations

### 一、概要

本論文は、現代中国外交におけるリーダーの思考を明らかにするために、国際関係論における独自の外交アプローチのための理論構築を行いながら、その理論を用いて現実にあった中国外交に新たな解釈を加え、その重要性を問うた意欲的な研究成果である。とくにここでは現代中国外交を「文化」の側面から考察することの重要性を力説しているが、その中でも国際関係論における戦略文化論と構成主義を中心とする先行研究をふまえ、「文化構成主義」という分析枠組みの理論構築を試みた。そして、その枠組みを用いながら、中国文化特有の人間関係を理解する用語としてしばしば用いられる「関係」(グアンシー)という概念を国際関係のレベルにまでスケール・アップし、中国外交の解釈のキーコンセプトとして応用し、中国・日本関係、中国・ベトナム関係、中国・旧ソ連関係、中国・米国関係における具体的な外交事象の分析を試みた。分析の結果、中国と日本、ベトナムおよび旧ソ連との関係の中では「関係」に基づいた外交行動パターンが見られたことを確認することができた。しかし、中国とアメリカとの関係に関しては、「関係」が成立する物質的、文化的な条件が欠如していたため確認できなかった。いずれにせよ、「関係」を基軸にして中国の外交行動を見ることの意義と、それによる新たな解釈が可能であることが示された。

### 二、論文構成

#### 1, Introduction : Why Culture? Universal Rationality and Cultural Rationality

Outline

Originality and Contribution

#### 2, Chapter 1 : Literature Review

Strategic Culture

Constructivism and the Second-generation Strategic Culture

#### 3, Chapter 2 : Analytical Framework: Constructing Cultural Constructivism

Redefining Culture

*Guanxi* as a Cultural Context for Chinese Perception and Behavior Rationale

Definitions of *Guanxi*—Significance : Resilience, Subjective Moral Standard

Long-term Reciprocity Behavior Patterns

*Guanxi* and Other Types of Relations: Differences and Similarities

Hypothesis and Analytical Methodology

3, Chapter 3 : Sino-Japan *Guanxi*

Toward Moral Superiority in a *Guanxi* of Amity: 1972-1982

Perception Shift: 1982-1989

*Guanxi* of Enmity: 1989-1998

The Negative Inertia: 1998-?

Conclusion

4, Chapter 4 : Sino-Vietnam *Guanxi*

Amity and Moral Superiority: 1949-1965

The Waning Positive Inertia and Perception Shift: 1965-1978

Enmity and The Negative Inertia: 1979-1991

Conclusion

5, Chapter 5: Sino-Soviet *Guanxi*

Amity, Positive Inertia and Moral Inferiority: 1949-1953

The Waning Positive Inertia, Moral Superiority and Perception Change: 1953-1960

Enmity: 1960-1969

The Negative Inertia: 1970-1989

Conclusion

6, Chapter 6: Sino-U.S Relationship, Never a *Guanxi*

Evaporated *Guanxi* of Amity and Sustained Enmity: 1949-1972

Truman Administration

Eisenhower Administration

Sino-U.S Relations in the 60s

Restoring the Relationship but Failing to Establish a *Guanxi*: 1970-1989

Clash of Cultures and Misinterpreted Behaviors: Tiananmen ~ ?

Conclusion

7, Conclusion

三、各章の説明

序章では、何故「文化」の側面を重視するのかを問い、その視角から外交を考えることの意義を論じた。例えば中国外交に関する先行研究の中で残されているパズルとして、例えば、①60年代を通して、中国は米ソ超大国と対峙し国家安全保障を危機にさらしてまでも、どの陣営にも歩み寄ろうとしなかったのは何故か。②日本やベトナムとの関係性における中国の行動の謎、つまり72年に日中国交正常化して、戦争賠償を一方的に放棄し、その後10年間、中国は日本に対して非常に寛大に振る舞ってきた。ベトナムに対しても49年からベトナム戦争まで一貫して寛大な支援を続けた。にもかかわらず、その後の中国の日本やベトナムに対する態度が豹変したのは何故か。パ

ワーだけではこの変化を説明することは難しい、というのが筆者の問題意識で、そこから中国独特の文化ビヘイビアとも言うべき「関係」によるアプローチが試みられた。

第一章「Literature Review」では、文化に関してこれまで国際関係論の分野で、どのような理論研究がなされてきたかについて述べた。特に戦略文化論の三つの世代、および構成主義を中心に、文化の役割をとらえる上で、先行研究に不足している部分を明らかにした。

第二章「分析の枠組み」では、国際関係における国家同士の社会的なかかわり合い、および国家レベルの文化的な行動パターンを同時とらえる文化構成主義の枠組みの精緻化を試みた。次に、中国文化の行動パターンとして「関係」の内容とその重要性を論じた。「関係」はさまざまな解釈がなされてきたがとくにその核心部分として、「主観的な道義基準」および「長期的な互惠関係」、という二つの特徴がある。これらの要素によって、中国文化特有の行動パターンが観察される。さらに、「関係」の行動パターンが中国外交にも現れるという仮説を立て、実証に入るための理論的根拠を示した。

第三章「日中『関係』」では、文化構成主義の枠組みに従って、日本との外交関係を分析した。「関係」の行動パターンが、1972年の日中国交正常化から2000年代初頭までの間にかけて、顕著に現れた。文化の違いによって、同じ行動に対する解釈が日中間で異なり、相互認識のずれや誤解を悪化させることとなった。さらに、日中関係に関するリアリズム・アプローチなどによる先行研究が十分な説得力を持ち得なかった歴史事象を考察した。とくに文化構成主義によって、こうしたパズルに対してより説得力のある解釈や説明ができると主張している。

第四章「中越『関係』」でも、日中のケースと同様に「関係」に基づく行動パターンが観察できることを論じている。1949年から1991年までの中越関係を、対越認識の変化に合わせて、三つの段階に分けて考察し、「関係」を軸として、中国のベトナムに対する認識が変化する過程が説得的に描けることを示した。「関係」に基づく互いの行動を、中越双方がどのように異なって解釈したかについて分析を深めれば、リアリズムなどの理論による通説では不十分な理解が、明らかにされる。

第五章「中ソ『関係』」では、さらに中国と旧ソ連との外交関係についても、文化構成主義のアプローチを用いた分析を試みた。1949年から1991年までの中ソ関係を、変化する「関係」の過程ととらえ直すことで、中ソのイデオロギー論争、国境紛争等に対して新たな視座から分析を行なった。なぜ60年代を通して、中国は米中両大国と同時に対立を深めていったのか。こうしたパズルに対して、限定的な答えしか示せないリアリズム・アプローチに対して、「関係」の行動パターンを観察することができ、文化構成主義アプローチの実証性がアピールできたと主張する。

第6章「米中関係、『関係』ではない」では、米中関係の中で「関係」の行動パターンを観察することができなかったとしている。その理由として、①「関係」が成立するための「主観的道義基準」および「長期的な互惠関係」のいずれも条件として存在しなかったこと、すなわち中国はアメリカに対して道義的に優位に立てるほど物質的に恵まれていなかったこと、②中国はやはり、二国間「関係」の構図でアメリカを認識しようとしていたが、アメリカはより客観的な価値基準を通して、国民の自由、民主主義の度合いなど普遍的な価値から中国を見ていたためである。この違いを象徴しているのが「天安門事件」であったと指摘している。

終章では、これまで展開した議論を基に、本論文の国際関係理論と中国外交の双方に対して学術的に貢献する幾つかの点をまとめた。国際関係論の側面では、文化と社会的な関わりあいという二つの重要な側面を同時にとらえること。文化を行動パターンとして定義することで、反証・観察可能な議論ができること示した。一方、中国研究の側面では、主に新たな分析の視座を提供することで、先行研究では必ずしも説得的な分析ができていなかった中国外交の断面を説明することが試みられた。

#### 四、評価と問題点

本論文の評価点として、とりわけ以下の3点が指摘できる。第1に、国際関係論において従来、文化は固定的な観念としてとらえられがちであったが、ここでは行動パターンとして定義することで、反証可能な理論とすべき試みを行った。つまり観察可能な人間の行動に分析の焦点を移し、いっどのように文化的な行動パターンが外交の場面に現れるかを観察し、分析する試みである。第2に、文化構成主義の理論構築では、他者（他国）のアイデンティティを変化して行くダイナミックなプロセスとして捉えようとしていることも、従来の構成主義にない、豊かな分析アプローチになっている。一般的な構成主義では、主に繰り返し構築されるアイデンティティについての描写にとどまり、アイデンティティの変化をとらえることはほとんどできていなかったからである。また、文化構成主義のアプローチは戦略文化論と構成主義とを融合させた理論の枠組みとして、国際関係の重要な要素である社会的な関わり合いと文化の働きを同時にとらえようとした野心的な試みであり評価に値する。

第3に、中国研究に寄与するところもある。現代中国外交を文化の側面から考察することの重要性を力説しているが、従来の中国外交史研究では、このような問題意識と分析理論からの本格的な研究はまだ十分には見られない。その点で新しい問題意識とアプローチからの中国外交史研究といえるだろう。

第4に、中国の他者・他国に対する認識が形成され、変化して行くメカニズムを描き出すことで、中国の対外政策の基調をとらえることができた。そして、文化構成主義のアプローチによって、中国外交におけるいくつかの具体的な行動を先行研究よりもより鮮明に解釈することができてきた。

もちろん幾つかの残された重要課題もある。国際関係理論の面では、幾つかの部分でやや大きさに言い切りすぎる部分がある。例えば、「構成主義ではこれまで国家レベルの文化についてほとんど関心を示さなかった」と断じているが、例えば、Katzensteinらは日本文化がどのように自衛隊をはじめとする組織の中で影響力を発揮したかについて論じており、そうした先行研究のアプローチをもっと丁寧に見ておく必要がある。また、中国外交史の中で「関係」を分析基軸にすると主張するには、もう少し第一次資料を十分にカバーし、事実関係を精緻化し、実証性を高める必要がある。本論文における事例研究だけでは、ある特定の期間でしか観察されることできないものなのか、それとも中国外交における行動パターンとして一般化できるのか、まだ断定できるほどの説得性はないといわざるを得ない。

## 五、結論

以上のような評価と問題点を踏まえ、総合的に判断するならば、幾つかの点で重要な研究課題が浮き彫りにされているが、とくに国際関係の一般的な理論を自ら組み替え、オリジナルな文化構成主義の理論アプローチの構築を試みたこと、さらにそれを現代中国外交に当てはめる場合、「関係」というキー概念を文化構成主義的な理論枠組みに設定しなおしたこと、その上で、中国と4つの国との外交関係を「関係」の中で捉えなおし、特徴づける試みを行ったことなどは、学術的にオリジナリティの高い成果となっている。また、資料・データの収集と分析、理論構造、結論などにおいても博士学位論文の基準を満たしていると判断される。

以上のようにその問題設定、分析アプローチ、実証的な考察のプロセス、結論などにおいて本論文は博士学位論文の基準を十分に満たしている。論文審査委員会一致しては博士学位に値すると判断し、博士の学位授与を提案する。

2012年12月21日

### 博士学位申請論文審査委員会

主査	早稲田大学大学院 アジア太平洋研究科	教授・社会学博士(一橋大学) 天児 慧
副査	早稲田大学 社会科学総合術院	教授・文学博士(東京大学) 劉 傑
副査	早稲田大学 教育総合学術院	教授・法学博士(慶応義塾大学) 青山瑠妙
副査	早稲田大学大学院 アジア太平洋研究科	教授・PhD(シカゴ大学) 篠原初枝